

解説

左ページの概念図（「生徒指導の実践・評価サイクル」）は、中学校での生徒指導が組織的に行われるためのサイクルと、その際、求められる生徒指導主事の具体的な行動を表したものである。

概念図の意図は、以下のとおりである。

I（生徒指導主事を中心とした）実態把握

生徒指導は、学校の教育目標を達成するために重要な機能の一つである（『中学校学習指導要領解説 総則編』）。このことから、学校では年度当初の教育目標を踏まえて、生徒指導の重点事項を明確にするとともに、その共通理解を図る必要がある。

また、重点事項に即して一年間の指導を組織的に行うにあたっては、常に生徒の実態を把握する必要がある。その際、生徒指導主事を中心としつつ、全教職員で家庭や地域など、多方面から「A 情報収集」し、適切に「B 情報集約」することで実態を把握することが大切である。

適切な実態把握が課題を明確にし、IIの（校長を中心とした）方針の明確化へとつながる。

生徒指導主事は生徒指導を組織的に行う上で、情報（収集・集約、整理、発信）のキーパーソンであることを自覚し、校長・教頭及び教職員全員と連携して、実態把握を行うことが大切である。

II（校長を中心とした）方針の明確化

組織の長である校長には、状況を正確に把握し、適切な判断によって方針を明確にすることが求められている。

そこで、生徒指導主事は、Iの（生徒指導主事を中心とした）実態把握の過程で行った「A 情報収集」と「B 情報集約」で把握した状況とそれに基づいて明確にした課題をできる限り正確に校長・教頭へ提供する必要がある。

このことから、生徒指導主事は、「C 校長・教頭への報告」に努めなければならない。

概念図では、「C 校長・教頭への報告」が3つの円に重なっているが、生徒指導主事は、あらゆる機会をとらえて、定期的に校長・教頭へ報告・連絡・相談することが大切である。

生徒指導主事は、校長が決定した指導・対応方針を、IIIの（教職員全員での）取組のなかで、実効性のあるものにするため、事前に具体的な「D 取組計画の策定」を行う必要がある。

なお、概念図では、「E 周知徹底」が2つの円に重なっているが、生徒指導主事は、「D 取組計画の策定」を進めつつ、できる限り早い段階から「E 周知徹底」のための検討も併せて行う必要があることを示している。

Ⅲ (教職員全員での) 取組

教職員間で合意形成を図って取り組むには、生徒指導主事は、Ⅱの(校長を中心とした)方針の明確化において、校長が決定した指導・対応方針の「E 周知徹底」を図ることが重要である。

このことは、生徒指導を進めるにあたっての協力体制の確立と、教職員間の指導の「ぶれ」の回避につながる。

「E 周知徹底」を図った後は、教職員全員で取組を始める。

生徒指導主事や一部の教職員のみで対応することなく、全教職員で取り組むには役割の分担が必要である。

この分担された役割が有効に作用するように「F 役割連携」*の意識を醸成することが大切である。このことは、組織を活性化する上で重要なことである。

より効果的な指導を行うためには、取組を定期的に「G 点検・検証」するなかで、指導の改善を図ることも組織が活性化するためのポイントである。

また指導の効果を検証することは、より実効性のある指導・対応方法の修正にもつながる。

* 役割連携とは、分担された役割を明確にした上で、互いの役割を意識して相互補完的に協力することである。

合意形成

3つの円の重なりに「合意形成」がある。教職員が互いに協力し補完し合うために最も必要なことが「合意」であり、「A 情報収集」から「G 点検・検証」までの行動分類を一つずつたどっていくことで合意形成が図られる。

合意形成を図るために、生徒指導主事に欠かせないのが「調整力」である。

この「調整力」は、校長・教頭への報告・連絡・相談とともに、関係教職員との日々のコミュニケーションを大切にして、誠実にその役割を果たすことで身に付く「力」である。

さらに、生徒指導を推進するうえで教職員間の指導に「ぶれ」がある場合に、著しい後退を招くことも明らかになっている。合意形成はこの「ぶれ」を防ぐ働きをしているものでもある。

●保護者・地域・関係機関との連携・協力

3つの円の外側に「保護者」、「地域」、「関係機関」がある。連携・協力をかけ声だけで終わらせないためにも、情報の共有が必要である。そのためには、学校は「保護者」、「地域」、「関係機関」から情報を収集するとともに、積極的に情報を提供することが大切である。

●実践と評価

以上に述べてきたサイクルは、実践を実践のみで終わらせることなく、それぞれの実践を評価することで、取組を見直すことの必要性を示している。

つまり、評価の視点を持つことは、目標達成への進捗状況について、そのつど分析し評価することが成果と課題を明確にし、その後の効果的な実践を生み出すことにつながる。

このように、実践と評価は常に一体となって繰り返される必要がある。したがって本冊子の概念図（P 1）を「生徒指導の実践・評価サイクル」と表記した。

●その他

概念図の中の黒字（生徒指導主事の行動）の位置やどの部分に比重を置くべきかについては、各学校の実情に応じて、臨機応変に変えたり、決定すべきことであるが、生徒指導における役割連携の推進には、基本的なとらえ方として、概念図に沿った取組を意識的に行うことが必要である。

*文中の下線部分は、生徒指導主事の行動。